

トピックス

## 光化学オキシダント緊急時対策要綱の改正

光化学オキシダント注意報もしくは光化学スモッグ注意報といった言葉を聞いたことはありますか？注意報は光化学オキシダント濃度が0.12ppmを超え継続することが予測される時に発令され、首都圏などでは夏場は頻繁に発令されているものです。長野県内では過去に発令されたことはありません。ところが、昨年はアジア大陸からの越境汚染の影響等で隣接の新潟県で初めて光化学オキシダント注意報が発令されました。また、長崎県の離島でも光化学オキシダント注意報が発令されました。このように身近なところに汚染の発生源が無い所で光化学オキシダントが高濃度になるといったケースが多くみられるようになりました。そこで、長野県では昭和54年に策定した「光化学オキシダント緊急時対策要綱」を平成19年8月に改正しました。

これまで長野市と松本市の2地域だけが注意報等の発令対象でしたが、改正された要綱では長野県全体を10地域に分けて(右図)、それぞれの地域毎に注意報等を発令するようになりました。発令に際しては、光化学オキシダント濃度が継続して0.12ppmを超えるかどうかが目安で、県の環境政策課と研究所で予測することになっています。

光化学オキシダントが高濃度になると目やのどに刺激を感じます。光化学オキシダント注意報等が発令された時はなるべく外出を避け、目やのどに刺激を感じた場合はうがいや洗眼をするなどの対応をお願いしています。

研究所では引き続き光化学オキシダントの常時監視を継続し、皆様に的確な情報提供をしてみたいと考えています。(常時監視の速報は環境省の大気汚染物質広域監視システムで提供されています。http://soramame.taiki.go.jp)

(兒玉家起 kanken-hozen@pref.nagano.jp)



新しい発令対象地域区分図

## 廃棄物分析研修に参加しました

埼玉県所沢市の環境省環境調査研修所で、2週間の廃棄物分析研修を受講しました。この研修は国、地方自治体で環境分析を担当する職員の廃棄物分析測定に関する専門的知識、技術の習得を目的としており、全国から15名が参加しました。この研修所では、他に地球温暖化対策やアスベスト分析等47コースの研修が行われており、年間約4,000人が受講しています。

産業廃棄物は焼却、破碎、溶融等の中間処理を経て再資源化されますが、再資源化できないものは最終処分場に埋め立てられています。その際に廃棄物が有害であるかどうかの評価が求められ、様々な分析方法があります。

研修では、焼却炉のばいじんを分析試料とし、溶出試験(廃棄物から有害物質がどのくらい溶け出すか)や含有量試験(廃棄物に有害物質がどのくらい含まれているか)で得られた試験液について、原子吸光法、ICP発光法、ICP質量法により有害重金属類の分析を行いました。実習は、前処理のノウハウから最新の分析技術まで盛り沢山な内容でした。ばいじんにはナトリウム、鉄、塩素イオンなどの共存物質が非常に高濃度に含まれるので、目的とする有害重金属類の分析には妨害となります。この点が河川水等と違って廃棄物分析の難しいところです。また、従来の分析だけで廃棄物による環境影響を適切に把握することは、実は非常に難しいと改めて痛感しました。

夜遅くまでデータ処理を行いながら、研修生相互の親睦を深めると共に、廃棄物行政の一端を担う責任を再認識する研修となりました。

(下崎 楓 kanken-junkan@pref.nagano.jp)



研修終了後、先生を囲んで

## 学会いろいろ

研究所と関わりのある学会を紹介します！

## 日本地下水学会

<http://jagh.jp/>

日本地下水学会は地下水に関する総合的な学問の発展ならびに地下水の開発・保全に関する研究、技術の広範な普及を目的とした学会です。

平成19年11月1日から2日にかけて、長野市若里市民文化ホールを会場にして日本地下水学会2007年秋季講演会とシンポジウムが行われました。このシンポジウムは長野県の共催で行われ、当研究所からも数名が運営に携わりました。

シンポジウムは「環境新時代の地下水資源管理を考える」をテーマに行われ、実行委員長である信州大学の藤縄克之教授がコーディネーターを務め、国、地方、大学関係者からなるパネリストにより①地表水とともに水循環系の構成要素である地下水の水資源としての公共化やマネジメントの重要性、②休耕田や水田等を利用した地下水涵養による育水や創水効果、③温暖化対策としてのヒートポンプを用いた地下水のエネルギー資源化などの議論が行われました。

翌11月3日は浅間火山周辺湧水地の現地見学会が行われました。二十数名の参加者がバスで長野市を出発し、小諸の八幡御膳水、群馬県の鬼押出し、軽井沢の白糸の滝、軽井沢御膳水を回りました。途中、当所の富樫自然環境保全班長が浅間火山の特徴や浅間火山周辺の地下水と地質について説明を行い、好評でした。

シンポジウムと現地見学会に参加して、地下水を水資源だけでなくエネルギー資源としても利用できることや浅間火山地帯における帯水層の構造等が理解でき大変参考になりました。

(堀 順一 kanken-hozen@pref.nagano.jp)



地下水と地質について説明する  
富樫自然環境保全班長(藤縄克之氏提供)

## 日本鳥学会

<http://www.soc.nii.ac.jp/osj/>

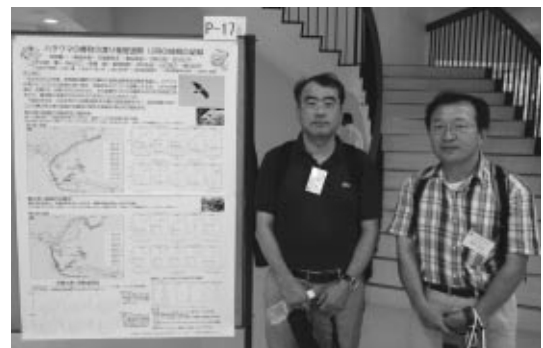
鳥学の発展と鳥類保護への学術的貢献を目的に、明治45年(1912年)に発足した学会です。会員数は約1,250名で、大学や研究機関の研究者のほか、在野の研究者も数多く参加しています。生態学や行動学の発表が主ですが、最近は生理学や解剖学などの発表も増え、鳥類のさまざまな面について扱うようになってきました。英文誌「Ornithological Science」(年2冊)と和文誌「日本鳥学会誌」(年2冊)の編集・発行のほか、日本産鳥類の記録や鳥類の保護に関することなど委員会を組織し活動しています。

今年の大会は、9月21日～24日に熊本大学黒髪キャンパス(熊本市)で開催され、約400名の方が参加しました。一般講演(口頭・ポスター等)が152題、シンポジウム2テーマ、自由集会10テーマ等の研究発表がありました。シンポジウムでは、南西諸島に生息する鳥類の系統や生物地理について、遺伝解析だけでなく行動学や生態学からのアプローチの発表もあり、新鮮味がありました。当所からは次のタイトルで発表をおこないました。(\*:当所研究員)

- 繁殖期前半におけるハチクマの養蜂場利用について：  
ある養蜂場での捕獲調査から見えてきたこと  
堀田\*・久野・佐伯・木下・細江・植松(晃)・中村(照)・嶋崎・松倉・植松(永)・樋口・平岡・時田・中村(浩)
- ハチクマの春秋の渡り衛星追跡：10羽の成鳥の記録  
時田・藤田・平岡・植松(晃)・久野・佐伯・内田・中山・高橋・堀田\*・中村・山口・樋口

なお、2014年の国際鳥類学会議の大会を日本に誘致することが正式に決まりました。

(堀田昌伸 kanken-shizen@pref.nagano.jp)



発表ポスターの前で、共著者の時田さんと